

ある日な、東京ドームで...

岡本 悠

八木の、童貞はなくなった...

真面目な、遊び人の八木

18 だか 20 か

新宿歌舞伎町の街へ向かった

慣れないが、待合室ではソワソワ

それでも、そこまで緊張はしていなかった気がする

黒い礼服の男が案内する

「お客様です」

そこには、美しい顔立ちの痩せた女性がいた

名前は、のぶよ、と云った

「初めてなの？」

八木は、そうだと、返事した

コンドームはつけていたと思うが

初めて、女の前で射精した

これで、俺も、一人前の男だ

でかい顔をできる

少し自信がついた

その日は、それで別れた

また、俺は現れた

また、のぶよ、を指名した

のぶよ、は、写真を見せた

「私、アントニオ猪木が好きなの」

「この前は、闘魂ビンタをされた」と言っていた

なんか、のぶよ、の、顔立ちの女性が

テレビで、ビンタされているのを、見たような気がする

なんか、偶然でもない気がした

俺は、誘った

今度、一緒に、東京ドーム行きませんか？

金がかからなかった

休日を空けてくれた

その日は、のぶよ、を、先生と見立ててエッチした

俺が、先生、先生というから

のぶよ、は、「そういうシチュエーションなの？」と、おどけた

晴れて、東京ドームの日

プライドがやっていた

最初の試合で、小原道由が、スタンドの膠着した試合をやっていた

ブーイングが飛んだ

記者らしき男たちが、これじゃ、文が書けないよ、と、愚痴っていた

一人の女性記者は、一生懸命に、メモしていた

男たちは、自分の金じゃないからいいけど、と云った

休憩時間になった

のぶよ、は、上の階に1人で行った

俺は待った

あとで、「どうしたの？」と聴くと

知り合いに合ってきたと言った

タバコを吸っていた

のぶよ、は、この前来た時は、もっと前の席だったと言った

晴れて、休憩が終わると、

スペシャルゲストで猪木が登場した

解説席には、石橋貴明がいて

客席には、清原和博がいた

猪木は、清原にビンタした

翌日の新聞で、清原は猪木を睨みつけていた

「いてえ！」と

猪木は、「この暗くなった時代に…」

と、喋った

俺は、思わず、「そんなことはないよ！」と、叫んでしまった

だって、のぶよ、と、こうして、デートできていたから

少し浮いていたか、わからなかった

のぶよ、は、静かに、シラを切った

高田　—　ミルコも、膠着した試合のまま、引き分けに終わった

俺は、ある日、つい、えみ、との、デートの時に、

この前、のぶよさんと、東京ドームに行った、と話してしまった

えみ、は、冷たい顔をして「名前を、言わなくていい」と、殺した

のぶよ、と、東京ドームに行った帰り道、

渋谷で、別れを告げた

俺は、そのまま去ってしまったが、

のぶよ、は、たぶん、これから夜の部がスタートするんじゃないの？

という、気配を感じた

俺は、そういうことが知らなかった

店でやるからいいだろうと思った

ただ、それ以来、なんとなく、もう店には行かなくなった

理由はわからない

のぶよ、は、10歳も上の女性だった

今、生きていたら、50歳の女性

猪木も、もう死んでしまった...

のぶよ、に、マウントポジションを、取ればよかったのに...

「完」